



通信

2026.9.30

No.198

公益社団法人 福島原発行動隊

東京都千代田区神田淡路町1-21-7

静和ビル 1階A室 〒101-0063

Tel: 03-3255-5910 Fax: 03-3525-4811

Mail: svcf-admin@svcf.jp Web: <http://svcf.jp>

転居された方は事務局(svcf-admin@svcf.jp)まで転居先をお知らせください

第 161 回院内集会 「福島第一原発の廃炉作業の現況」報告

9月17日、公益社団法人 福島原発行動隊は、参議院議員会館 101 会議室において毎年秋に開催してきた標記の集会を開催しました。講師は東京電力から6名、資源エネルギー庁から6名。参加者は会場に6名、オンラインで6名でした。

なお、資源エネルギー庁の職員の方々からは「福島第一原発の廃炉の進捗状況報告」、「質疑等」とともに一切発言がありませんでした。

なお今年度から経産省より、講師個人への SNS などでの誹謗中傷が生じていることから、

「1. 参加する職員の特定につながる一切の行為は行わないこと。具体的には、

- ・撮影・録画・配信を行う際は会場側を写す等を徹底すること(取材目的のジャーナリスト・マスコミも同様とすること)。

- ・職員の氏名は議員事務所限りとし、事後を含め、参加者と共有しないこと。意見交換の場やその前後において、職員に「〇〇さん」と声掛けすることはしないこと。また、氏名を訊ねる、名刺交換を求めることもしないこと」等の申し入れがあり、本誌集会報告中でも講師の個人名、映像は掲載していません。

この集会では、2022 年からは、より密度の濃い講演・質疑とするために、集会に先立って行動隊から講師に事前質問をするという形をとってきました。

今回も行動隊は 8 月末には下記の事前質問を講師あてに発信していたのですが、講師によると、事情は分かりませんが、事前質問を受け取ったのは集会前日だということであり、集会当日は事前質問への回答はなく、後日速やかに文書回答するということでした。

集会は、紹介議員である牧山ひろえ参議院議員による挨拶、東京電力による福島第一原発の廃炉の進捗状況についての報告、質疑等の順で行なわれました。

＜東京電力への事前質問＞

【状況認識】

(1) 福島第一原発が有するリスクの規模感を得るため、原子力規制委員会が「[福島第一原子力発電所
の中期的リスクの低減目標マップ](#)」において福島第一原発のリスクの評価軸としているインベントリを評価軸として、事故後のチヨルノービリ原発と福島第一原発のリスクの大きさを比較してみました。

ウィキペディア「チェルノブイリ事故との比較」によると、

「事故直後、原子炉が停止した時点において、炉心に蓄積されていた放射性核種の存在量(炉心インベントリー)を比較すると、ヨウ素 131 は、チェルノブイリ原発 4 号機の $3200 \times 10^{15}\text{Bq}$ に比べて、福島第一原発 1 - 3 号機の合計の方が、 $6100 \times 10^{15}\text{Bq}$ と、約 1.9 倍となっており、セシウム 137 も、福島第一原発 1 - 3 号機の合計の方が約 2.5 倍ほど多い」、

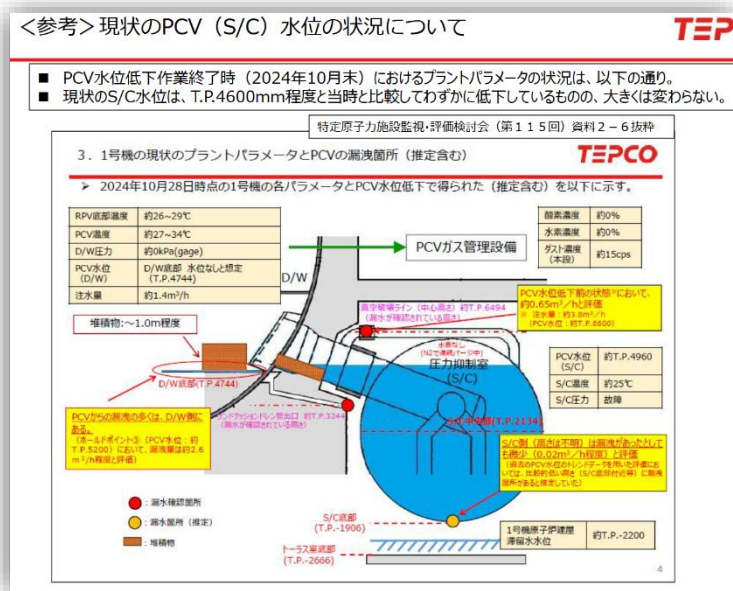
「炉心インベントリーは、ヨウ素 131、セシウム 137 とともに、福島第一原発 1 - 3 号機の合計がチェルノブイリ原発 4 号機よりも上回っているが、放出割合はチェルノブイリ原発 4 号機の方が遥かに多い。そのため、実際の大気中への放出量としては、ヨウ素 131、セシウム 137 とともに、チェルノブイリ原発事故の方が福島第一原発 1 - 3 号機の合計よりも多いものと見積られている。」

とあります。

ウィキペディア上の記述なので検証の必要はありますが、現在の福島第一原発のリスクの大きさはチェルノービリ原発のリスクに数倍している可能性があると思います。

(2) 2024 年 8 月、2 号機使用済燃料プール(以下、SFP)のスキマサージタンクの水位が低下しました。東京電力は、漏えい水の流出状況から、既設の燃料プール冷却浄化系ポンプ或いは熱交換器設置エリアで水が漏えいしたものと推定するとともに、SFP 一次冷却系を停止しました。10 月には、FPC 熱交換器室内の配管から漏水していることが確認されています。

また、2024 年 12 月からは、1 号機において原子炉格納容器水位の自然降下が確認され、2025 年 2 月 17 日の第 116 回特定原子力施設監視・評価検討会において、確認や補修・付け替えが困難 S/C 底部から北東三角コーナーにつながる配管が経年劣化により破損し、そこから S/C 内部の高濃度の滞留水（S/C 内包水のセシウム濃度およびトリチウム濃度は建屋滞留水のそれより一桁高い）が原子炉建屋内に漏えいしているという推定が示されました。



さらに、東京電力は [2026 年 6 月 12 日の日報](#) で、6 月 11 日、2021 年 2 月に全燃料の取り出しが完了したものの、高線量機器やガレキが残されている 3 号機の使用済み核燃料プール循環冷却一次系スキマサージタンクの水位の低下が確認されたことを報じています。

このような原子炉ないし使用済み核燃料プールに直結する既設配管の経年劣化による損傷は物理的事象であり、今後既設配管の経年劣化による損傷・漏洩が増えていくことは避けられないと思います。

(3) 3 号機における核燃料デブリの本格的取り出し工法としての＜充填剤を使用する上・横アクセス併用工法＞は、来年度夏ごろまでが現場検証・設計検証の期間とされています。

【質問・意見】

(1) 【状況認識】(1)について、共有可能でしょうか。

(2) 【状況認識】(2)について、対応策は検討されているのでしょうか。

(3) 【状況認識】(3)について、どのような現場検証・設計検証が実施され、また、今後取り組まれるのでしょうか。

(4) 2 月の特定原子力施設監視・評価検討会第 121 回会合、[6 月の第 122 回会合](#)において、東京電力は、中期的リスクの低減目標マップの改定に関して、原子力規制委員会から、

「技術的困難性があるがゆえに大きな不確実性を含むと考えられる短期的な目標の達成時期に関して精査を行う必要があること、また何をもって目標を達成したとするのかなど、東京電力との間で認識が不明確になりつつあるものがあるということが示され、これらに関して精査等を行う必要があると、事務局から報告がございました。

廃炉に向けて中長期的に実現すべき姿と、それに向けた目標等がより明確になる適切なリスクマップにすることを目的として、リスクの低減や技術的難易度等について、今後、東京電力に確認を行う必要があると考えております」

という廃炉作業の構造化についての重要な対応を求められています。東京電力はどのように対応されているのでしょうか。

(5) 原子力規制委員会に認可された[「福島第一原子力発電所 特定原子力施設に係る実施計画」](#)に基づき東京電力が実施している現行の廃炉作業において、全号機の使用済み核燃料が、計画通り 2031 年ごろまでに取り出され地上の共用プール・乾式キャスク仮保管設備に保管されること、工法について現場検証・設計検証中の核燃料デブリの通り出し工法が成立した場合、無事完了することを願っています。

しかしその後の、使用済み核燃料の福島第一原発からの搬出、取り出された場合の核燃料デブリのその後の保管・処理・処分をどうするか等の、原子炉規制法に定められた特定原子力施設のバックエ

その場合には、法に基づく特殊会社等、国が実施主体となり、健全炉と事故炉のバックエンドの調整を図りながら、福島第一原発の廃炉を進めていかざるを得なくなる可能性も生じてくると考えますが、いかがお考えでしょうか。

今号発行後に回答が届いた場合は、SVCF 通信 10 月号に掲載します。

「福島第一原発の廃炉の進捗状況報告～東京電力」

- ・ 過去に放射性物質の吸着・除去のために設置した高温焼却炉建屋およびプロセス主建屋地下階の高濃度のゼオライト土嚢等について、順次回収し、高台の仮保管施設への移送作業を進めている。

- ・ ALPS 処理水の海洋放出は、2023 年度から開始された。2023 年度 4 回、2024 年度 7 回、2025 年度 7 回の海洋放出を実施した。2026 年度は 8 回の海洋放出を計画している。
- ・ 海水や周辺生物のモニタリング調査(トリチウム濃度等の測定)において、有意な数値の変動や異常値は検出されておらず、環境への目立った影響は見られない。
- ・ これまでのところ、気象条件や地震等による一時的な停止はあったものの、概ね計画通りに安全かつ順調に放出作業が進められている。

公益社団法人福島原発行動隊

- ・ 2号機においては、ロボットアーム等を用いた燃料デブリの試行的取り出しに向けた取り組みが進められている。ロボットアームは関節部のモーターが浸水により動作せず、モーターを交換するとともに防水対策を施しているところ。
- ・ 3号機については、「上部(アクセス)からの取り出し」と「横方向(サイドアクセス)からの取り出し」を併用する工法について、昨年度から12～15年をかけて実現への必要条件を調査しているところ。

4. 1・2・5・6号機原子炉建屋使用済燃料プールからの使用済燃料の取り出しと地上保管

- ・ 現在、1・2・5・6号機の原子炉建屋5階使用済燃料プールに残されている合計で2751体の使用済燃料等については使用済燃料プールから取り出し、地上の共用プール→乾式キャスク仮保管設備で保管する計画。2031年の取り出し完了を目指し、6月から2号機使用済燃料プールからの取り出しが開始された。1号機では取り出しに向けて、水素爆発によって原子炉建屋5階に散乱しているガレキ等の撤去に着手した。
- ・ 現在の共用プールや仮保管設備の容量は100%近くに達しつつあるため、高台などに乾式キャスク仮保管設備の増設工事を計画・進行している。

この増設分に燃料を順次移送することで共用プール等に空きスペースを作り、2号機や1号機等からの新たな燃料取り出し・保管作業をスムーズに進める体制を整えつつある。

「 質 疑 等 」

行動隊：

行動隊からの事前質問について昨日入手され本日回答される準備ができなかったということなので、ここで事前質問の趣旨について再度説明させていただきます。(説明は省略)
文書で回答いただけるということでよろしいですね。

東京電力：

質問の趣旨は分かりました。後日文書で回答します。

質問：

「東電文学」という言葉の社内における意味や定義について伺いたい。

東京電力が公表する広報資料や説明資料では、客観的な事実や責任関係を曖昧にするた

め、まわりくどい表現、主語を曖昧にした受動態の多用、あるいは過度な抽象化・専門用語化が行われてきた。社会からは『事実や責任を不透明にするための文章表現』として『東電文学』と揶揄されてきた経緯がある。

しかし、8月20日に開催された「ともに脱原発を考える会」に出席した貴社の原子力センター長は、質疑において自社の回答文言を解説する中で、誇らしげに「これは東電文学です」と発言した事実がある。

貴社において、この「東電文学」という言葉はどのような意味・ニュアンスとして共有され、組織として公式にどう受け止めているのか、具体的な見解をいただきたい。

回答(東京電力)：

「東電文学」という言葉自体について、会社として公式な定義や見解が存在しているわけではありません。

8月20日の会合において私が『東電文学』という表現を用いた点につきましては、専門的かつ複雑な技術的・構造的背景を皆様に説明するにあたり、言葉を噛み砕いて解説しようとした際の『比喩(たとえ表現)』として用いてしまったものです。

開き直りや誇らしさを持って申し上げたわけではなく、言葉足らずにより誤解や不快感を与えてしまったのであれば撤回、お詫び申し上げます。

質問:

社会や被災者・国民が『誠実さを欠く不透明な表現』と批判している対話姿勢を、貴社内部では『論理的・技術的に洗練された高度な表現技術』のように肯定的に捉えているとすれば、それこそが国民や被害者との対話を拒絶する組織風土そのものではないか。

8月20日の原子力センター長の発言、およびこれまでの表現姿勢を、現在の「廃炉推進・情報公開の責任者」としてどのように評価し、今後どのように改善していく方針ですか。

回答(東京電力):

ご指摘の点につきましては、私どもとしても真摯に受け止めなければならないと考えております。

組織として『分かりやすく誠実な情報公開』を目指してきたつもりではございますが、専門的な内容を正確に伝えようとするあまり、どうしても表現が難解になったり、受け手にとって分かりづらい・煙に巻かれていると感じさせてしまう部分が合ったことは否定できません。

完璧な回答や説明に至らない部分や、終わりが見えない課題もございますが、地域の皆様や国民の皆様のご理解と信頼を得るためには、できる限り客観的な事実に基づき、平易で直接的な言葉遣いに努めていくことが不可欠であると認識しております。従来以上に分かりやすい説明と情報公開に努めてまいります。

【 参 加 者 の 感 想 】

本集会は、毎年同一テーマ、同一講師(東京電力、廃炉等支援機構、資源エネルギー庁)で6年以上にわたって行われているものです。

廃炉作業は計画通り順調に進んでいるという講師の報告が例年の集会での基調です。

しかし、[2021 年の集会](#)では、行動隊会員からの「現在の福島第一原発の放射能の推定総量(インベントリ)を明らかにし、節目ごとに、どれだけの部分が、非管理状態(事故時のままの状態)から

管理下に移ったかということを明らかにすることでステップバイステップの進捗状況が分かりやすくなるのではないか」という提案に対し、講師から「今後の参考にさせていただく」という回答とともに、「総量(インベントリ)については、3月に開催された第89回「検討会」に原子力規制庁が提出した資料「東京電力福島第一原子力発電所の中期的リスクの低減目標マップ」に掲載されている」という情報が提供されました。

2022年の集会では、講師は、原子炉格納容器等の経年劣化を正面から認め、イチエフの状況、工法・工程等について、さまざまな可能性を排除しないとしていました。

2024年の集会では行動隊会員から「リサイクル燃料貯蔵の中間貯蔵施設(青森県むつ市)への早期の搬出による、福島第一原子力発電所内外のリスクの低減」という提案がなされ、この時は「現在のところ具体的な計画はない」という回答でしたが、2025年には「青森・中間貯蔵施設、福島原発の使用済み核燃料も搬入方針 東電など計画」という報道がなされ、2025年の集会では、「福島第一原子力発電所の構内にある共用プールや乾式キャスク仮保管設備の容量逼迫を回避し、長期的な安全管理を確保するための計画であり、受け入れ先となる青森県においては、安全性や

地域振興策が議論されており、住民合意形成が課題である」と報告されるに至っています。

質疑の中では、こうしたマスメディアがあまり取り上げない現在の福島第一原発の状況・リスクを把握するための回答が得られてきました。

今後届けられる文書回答により、現在の福島第一原発が抱えるリスクについての認識が深まり、原子力規制委員会から、「何をもって目標を達成したとするのかなど、東京電力との間で認識が不明確になりつつあるものがある」とされた事項が何なのか、またどう対応していくのかが明らかにされ、このような課題を抱える中で、今後どのような体制で廃止措置に向かうのが適切なのかということについての東京電力の考えが得られることを切に願います。

会員:中島賢一郎



【夏の思い出番外編

～7月 北海道東部エリア旅行】

会員 麻生 良二

二日間の知床半島観光バス旅行の後、7月3日は川湯温泉～摩周湖～阿寒湖～川湯温泉をレンタルバイクで300km走り、7月4日は川湯温泉～常呂カーリングセンター～川湯温泉と500kmを移動しました。

北海道の平日の道は空いていて、幹線道路はよく整備され、車と信号の多い市中に入らなければ地元民も100km/hで走っているの、それを追いつく際には時速〇〇〇kmは普通に出せて高速走行を楽しむことが出来ました。

常呂カーリングセンターではTVでお馴染みのリンクやオリンピックのメダル娘達の写真やユニフォームなどを見ることが出来ました。

今回、長距離高速バイク走行を十分楽しむことが出来たので、歳も歳なのでこれにて長距離高速走行は卒業して、あとは都内をノンビリと走るバイク生活に踏ん切りがつかしました。

////////////////////////////////////

【行動隊 10 月スケジュール】

● 第 162 回（院内）集会

期日：10 月 14 日(水)11:00 開始

会場：参議院議員会館 102 号室

Online(Zoom)会議を同時に開催

講師：小野 明 氏（東京電力福島第一廃炉
推進カンパニー・プレジデント兼廃炉・汚
染水対策最高責任者）

テーマ：「福島第一原子力発電所の現状と
今後の課題」



● 10 月福島行動

川内村ブドウ収穫祭参加他

期日：10 月 10 日(土)～13 日(火)

● 通信第 199 号発行： 10 月 21 日(水)予定



● 連絡会議： 以下の各金曜日 10 月 2 日・9
日・16 日・23 日・30 日

左地図の行動隊淡路町事務所およびオンライン